

氏名	于 艶麗
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第376号
学位授与年月日	2014年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	シク活用形容詞の歴史的研究
審査委員	(主査)沖森 卓也 鈴木 彰 永井 悦子(玉川大学リベラルアーツ学部准教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

序章

第一節 研究の目的

第二節 先行研究

第三節 研究の方法

第一章 上代語シク活用形容詞について

第一節 上代語形容詞の概観

第二節 上代語形容詞の語構成

第三節 上代語形容詞の情意性

第四節 シク活用形容詞語幹の性質

第五節 まとめ

第二章 中古中世シク活用形容詞について

第一節 『日葡辞書』に見る形容詞語構成の変化

第二節 中古中世新出シク活用形容詞の語構成

第三節 中古中世新出シク活用形容詞の語幹の性質

第四節 室町時代シク活用形容詞の接尾語の性質

第五節 室町時代形容詞活用の変化

第六節 まとめ

第三章 近代語「しい」型形容詞について

第一節 近代語「しい」型形容詞の語構成

第二節 近代語新出「しい」型形容詞の語幹の性質

第三節 近代語「しい」型形容詞の接尾語の性質

第四節 漢語形容詞について

第五節 まとめ

第四章 シク活用形容詞の意味分類

第一節 『分類語彙表』に基づく意味分類

第二節 シク活用形容詞の意味分類の再検討

第三節 まとめ

第五章 シク活用形容詞の意味変化

第一節 状態シク活用形容詞の意味変化

第二節 情意シク活用形容詞の意味変化

第三節 まとめ

終章

(2) 論文の内容要旨

古代日本語の形容詞は、形態的特徴によって「ク活用」と「シク活用」の二つのグループに分けられる。「ク活用」の形容詞には物事の客観的な属性を表す語が多いのに対して、「シク活用」の形容詞には主観的な情意を表す語が多い。それ故、現代日本語の感情・感覚を表す表現には、「しい」型の形容詞が多く存在している。本論文は、主に語構成論と意味論の視点から、形態と意味の上において特徴がある「シク活用形容詞」に注目し、その語構成、活用、意味の歴史的变化を明らかにしようとする。

第1章では、ク活用形容詞と比較しながら、上代語シク活用形容詞の語構成と情意性について考察する。上代の形容詞は、語基の意味を重視し、接尾語「し」による単純構造の割合が大きく、ク活用の約五割、シク活用形容詞の約七割を占めている。シク活用形容詞の語幹は情意的意味を持つ語基が多く存在しているが、状態的意味を持つ語基も少なくない。事物の属性は一定の客観的な基準がある一方で、個人による主観的な判断基準でも成り立つからであるとする。

第2章では、中古・中世のシク活用形容詞の語構成と中世における形容詞活用の変化について考察する。平安時代から室町時代まで、形容詞の語構成の特徴として現れるのは、「複合」と「派生」によって「合形成容詞」が大量に産み出されたことである。ク活用形容詞では主に「名詞＋形容詞」が増加し、シク活用形容詞では疊語形容詞が増加するとともに、派生形容詞が発展したことが注目される。接辞による派生形容詞では、平安時代に接頭語「もの」、接尾語「がまし」が、室町時代に接頭辞「こ」、接尾語「らし」が現れ、鎌倉時代には語基に漢語が多用されるようになったこと、評価や主観的判断を表すためにシク活用からシク活用に転じた語も見られること、「し」の情意的意味が改めて意識されるようになることなどを指摘する。

第3章では、近代語においては、既存の語基を用いる合形成容詞が発達し、接頭辞「いけ」「くそ」などによって多くの派生形容詞も造られたこと、江戸時代には接尾語「がまし」「らし」「くろし」「くるし」「たらし」などが大いに造語力を発揮したこと、意味的には否定的評価に傾く傾向があることなどを述べる。

第4章では、『分類語彙表』（1964）の分類基準に従って分類して、シク活用形容詞の意味特徴をより明確に分析する。そして、意味を13に分類して、上代・中古中世・近代におけるシク活用形容詞の時代的消長を把握する。その結果、形容詞の意味方向から見ると、時代につれてマイナス方向に傾く傾向があり、特に、評価形容詞と対他形容詞においてそれが顕著であることを明らかにする。

第5章では、13の意味分類を大きく「状態」と「情意」に分けて、時代による意味変化の傾向を分析する。「状態→状態」という変化では様相形容詞、特に属性形容詞が多いこと、「状態→情意」という変化では、評価への傾斜が最も成立しやすく、特に様相形容詞に顕著であること、「情意→状態」という変化では様相形容詞が最も多く、特に「驚き」「焦燥・苦悩・不愉快・不満」などの対自形容詞や評価形容詞に目立つこと、また、境遇形容詞と程度形容詞への変化も注目されること、「情意→情意」という変化では評価形容詞や対自形容詞に変化する語が多いこと、また、意味変化過程で「意味の良化・悪化」「評価の逆転現象」が生じていることなどを指摘する。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語のシク活用形容詞について、語構成・活用・意味の面から総合的に考察したものである。シク活用形容詞をすべて抽出し分類することによって、その歴史的变化の全貌を明らかにすることに根気強く取り組んだ研究であり、独自の新たな見解を実証的に提示することに成功したものとして高く評価される。

まず、時代別にシク活用形容詞の活用・語構成について、歴史的にその傾向を分析した論考は従来にはほとんどなく、初めて体系的に言及した論考として高く位置づけられる。その語構成について、上代では語基が単純であったが、中古・中世では疊語形容詞が増加するとともに接頭辞や接尾語を添えた派生形容詞が発展したこと、特に中世では、名詞・動詞・副詞・形容詞・形容動詞など、多くの語基がシク活用形容詞の語幹に直接現れるようになったこと、接尾語「がまし」「らし」などによって語基に対する情意性の要求や疊語形の音節数の制約から解放されて、多様な語基が語幹に現れるようになったこと、近代語においては「名詞+形容詞」が多用されるようになり、接頭語「いけ」「くそ」などが新出して、大量の派生形容詞が造られるようになったが、明治以降は「たらし」以外、接尾語の造語力は大幅に低下したことなど、いずれも新たな知見であり、重要な指摘である。

第二に、シク活用形容詞の、ク活用形容詞と活用が合流した後の特徴について包括的に全体的に扱って、その傾向を詳細に分析し記述することができたことは特筆すべき点である。室町時代以降では意味の上から分類すると、評価形容詞、対自形容詞（自分自身に向けられる感情を表す形容詞）、様相形容詞の順で多く、評価・対自とも意味がマイナス方向に傾斜していることなどを述べるとともに、中世において、ク活用からシク活用に転じた形容詞には評価や主観的判断の意を表すものが多く、室町時代から江戸時代にかけて、活用語尾「し」の主観的な判断・認識などを表す情意的意味が改めて意識され、臨時的あるいは意図的にシク活用にされることを明らかにした点などは、詳細な調査・分析を踏まえた大きな成果であり、意義深い。

第三に、意味の分類に新たな視点を導入し、形容詞における従来の、状態と情意という2分類をさらに細分化して、それぞれの時代の特徴、そして、意味変化の傾向を捉えることに成功している点である。その結果、〈不明瞭なさま〉〈多忙なさま〉という様相や境遇を表す意味が不愉快や焦燥などの感情に、また、〈驚くべきさま〉〈不愉快なさま〉という対自的感情や評価を表す意味は様相に転換しやすいなどというような、形容詞の意味変化を総体として記述しえた点は画期的であり、かつ、示唆に富んでいる。

シク活用形容詞の、これまでほとんど言及されてこなかった史的変遷について、具体的かつ実証的に明らかにし、時代の特徴、その変化を丹念に追った手堅い論述には説得力がある。その意味変化の傾向などについても新たな知見が数多く得られたことも高く評価できる。ただ、その意味分析や意味分類には不十分な点があることも否めない。そのような今後の課題として残されている点はあるものの、本論文は、シク活用形容詞の歴史的变化の全貌を明らかにすべく、果敢に取り組んだものとして、その意義と価値は大きい。網羅的に形容詞語彙を扱い、丁寧に分析し、適切に記述することで、多くの新たな知見が得られたことは、本論文が質の高い研究であることを裏付けるとともに、今後の更なる研究の進展を大いに期待させる。